27

『参攷挨穴篇』について

寺川　華奈
花園鍼灸院／日本鍼灸研究会

『参攷挨穴編』2冊は，目黒道琢（元文4年［1739］～寛政10年［1798］）が寛政9年（1797）の5月から6月の凡そ一ヶ月間で纏め上げた経穴書で，その稿本を，道琢没後40年余を経た天保10年（1839）年）に至って，道琢の門人である藍川玄慎が補訂を加え，序を附して完成させたものである．巻末に嘉永4年（1851）の日付が見られる東京大学附属図書館所蔵本が唯一の伝本と見られる．

藍川玄慎（?～1842）の名は慎，号は茅山，通称は新吾，出雲松江藩家の儒医で，医書や本草書の考證に業績を遺した．著書に『太素経攷異』,『茅山査苞』,『搏桑果図考』,『読肘後方』,『大同類聚方攷異』,『大同類聚方窃疑』,『康頼本草校註』などがある．また『参攷挨穴編』以外の鍼灸関係の著作に，『穴名捜捷』（天保8年［1837］),『鍼灸甲乙経孔穴主治』（天保10年［1839］),『読甲乙経丙巻要略』（天保8年～10年［1837～1839］頃成立.『読骨度篇』を附す）がある．特に『参攷挨穴篇』,『鍼灸甲乙経孔穴主治』,『読甲乙経丙巻要略』の3作には，中国古代の兪穴学に対する系統的な関心が伺えて興味深い．

本書では，手太陰肺経から足厥陰肝経までの十二経脈ごとに，兪穴，骨度，付録に分かち，兪穴では典拠や部位を，付録では流注について述べている．ただし経脈上の兪穴の配列は，『十四経発揮』のそれとは異なる．

本序において玄慎は饗庭東庵（元和七年［1621］～延宝元年［1673］）の『経脈発揮』を「復古之学」の嚆矢として認めつつも，経脈，特に兪穴（経穴）の位置に関する不詳な点は，宮本春仙に師事した中島元春（玄春とも）により「終拂雲霧」するが如く明らかとなったと述べている．そして「甲乙以下，経穴部位，往々不同」であると指摘し，道琢の援引（『素問』『霊枢』『甲乙経』はもとより『千金方』『外台秘要方』『銅人腧穴鍼灸図経』『類経』『医学綱目』等に及ぶ）に加えて，自らもまた医書及び医家注を引き，按語を加えて詳説する．この按語の特徴として中島元春の説，ならびに『太素』の経文及び楊上善注からの引用が多く見られる点が挙げられる．

ところでほぼ同時期に成立したであろう玄慎著『読甲乙経丙巻要略』では，『甲乙経』巻三の目次を含む巻頭より巻末までの経文に対し，『素問』の王冰注および新校正注を中心に，本書と同様，広く医書や医家の注を用いて校勘および解説を行うが，ここには中島元春の言はみられず，また引用される『太素』（及び所引の『明堂』）や楊注の回数も少ない．元春の説が多い理由は，骨度に関するものも含めて兪穴が経脈上に位置する経穴として展開されるためであろう．『太素』に関しては『参攷挨穴編』における重要視を見て取ることができる．

ところで自序の中では「其緝彙不遺纖芥，而尽焉者也，挨穴之法，於是乎，詳悉矣」と一定の評価を示す堀元厚（貞享3年［1686］年～宝暦4［1754］年）の『隧輸通攷』（延享元年［1744］序）であるが，その本文を引用しつつも，按語の中では元厚の説に対し「諄々弁以第三節為本節之非」「鍼灸聚英已云」「鍼灸大全已云」などと手厳しく指摘する．

本書は『十四経発揮』が浸透した江戸時代後期において，体幹と手足とを分けることなく「全ての兪穴が経脈の上に並び，経脈は連なり循環する」という『十四経発揮』の発想は残しつつ，『甲乙経』における兪穴とそれ以降に登場した医書や兪穴書を考証し，さらに日本で展開されてきた宮本春仙，中島元春による兪穴研究の成果，ならびに新出の『太素』及び楊上善注を用いて照査を加え，道琢の講述した経絡経穴書として纏める一方，当時「挨穴」として広く知られた堀元厚の兪穴説に対しても自らの見解を示そうとしたように見える．